

12世紀ホラーサーン地方の一アーリムに関する研究の現状と展望
—— アブー・サード・アブドゥルカリーム・アッサムアーニーについて ——

Research Possibilities for Studies on Abū Sa'd
'Abd al-Karīm al-Sam'ānī al-Marwazī

西村 淳一
Jun'ichi NISHIMURA

Abstract After the Arab conquest in 31/651 and until its destruction by the Mongol invasion in 618/1221, despite the many changes it underwent, the city of Merv remained a cultural center of Khurāsān along with the city of Nishapur. Many 'ulamā' (i. e., Islamic scholars) came from this region. Research on the activities of the 'ulamā' from Merv will enable us to compare these with that of the 'ulamā' of Nishapur on whom much research has been conducted; this will lead to a better understanding of 'ulamā' societies in the large cities of northeast Iran.

Little is known about the 'ulamā' of Merv as the book on the local history titled *Tarīkh Marw (The History of Merv)* no longer exists. It is, however, possible to formulate new approaches for conducting research on them using Arabic works by an 'ālim from Merv, Abū Sa'd 'Abd al-Karīm b. Muḥammad b. Maṣṣūr al-Tamīmī al-Sam'ānī al-Marwazī (d. 562/1166). He seems to have written more than 50 works, but many of them have been lost, and the manuscripts of only 7 titles are confirmed to currently exist. Using these is a key to advance the research on the 'ulamā' of Merv and Khurāsān.

In this context, studies on matters concerning al-Sam'ānī are indispensable as a first step to using his works and as a part of the research on the 'ulamā' of Merv. Munīra Nāji Sālim and Muwaffaq b. 'Abd Allāh b. 'Abd al-Qādir have already provided a detailed biography and history of his family, "Bayt al-Sam'ānī", and C. Brockelmann and R. Sellheim have compiled philological data of his works. Their previous studies should be supplemented by future research. This article therefore reassembles information about al-Sam'ānī, including new findings.

Keywords Merv (メルヴ), Khurāsān (ホラーサーン), 'ulamā' (ウラマー), al-Sam'ānī (サムアーニー), *Kitāb al-Ansāb* (『ナサブの書』)

は じ め に

プレ・モンゴル期、すなわち西暦13世紀初頭以前の、イラン北東部ホラーサーン地方におけるウラマー (ulamā' 単数形はアーリム 'ālim 「学者」) の社会的活動については、主に史

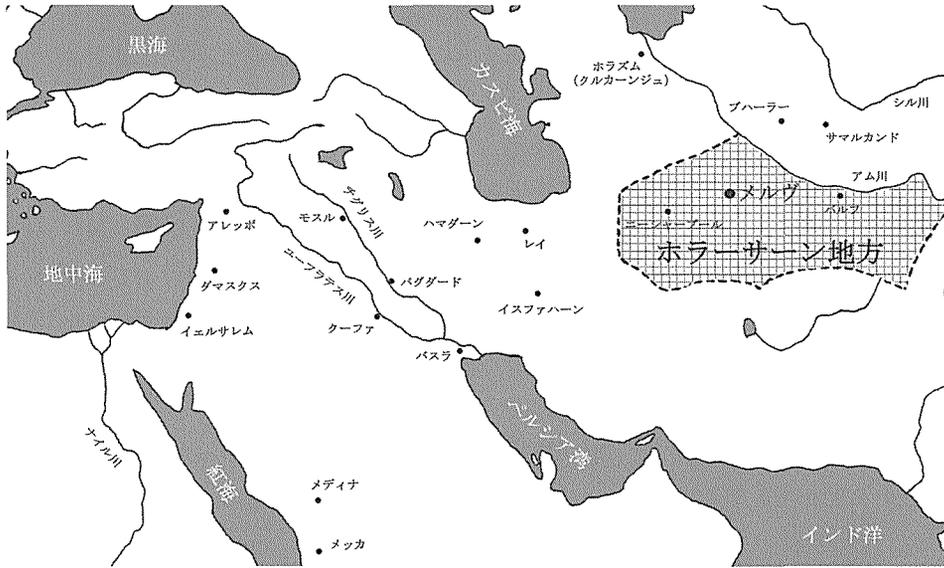
料上の制約から、ブレット (Bulliet, R. W.) の著作を代表とする主要な先行研究がニーシャープールの事例を検討している [Bulliet 1970, 1972; 森山 2004]¹⁾。一方、筆者はそのような先行研究との比較を念頭に置きつつ、メルヴ²⁾の事例を研究しようと試みている [Nishimura 2008; 西村 2009, 2011, 2014]。

メルヴは、西暦 651 年にアラブ・ムスリムによって征服されて以降 1221 年にモンゴル軍によって破壊されるまで、多少の浮沈こそあれ、ニーシャープールと並ぶホラーサーン地方の文化的中心地であり続けた。特に法学、ハディース学の分野において多くのウラマーが輩出したことで知られている。それゆえ、イラン北東部の大都市におけるウラマー像およびウラマー社会像の解明という点において、また研究の進んでいるニーシャープールのウラマーとの比較という点においても、同地の事例を研究する意義は小さくない。

メルヴのウラマーに関しては、地方史文献『メルヴ史 (*Ta'rikh Marw*)』が散逸し現存していないことが大きな障壁となり、これまで十分に検討されてこなかった³⁾。しかし、同地出身のアーリム、サムアーニー (Abū Sa'd 'Abd al-Karīm b. Muḥammad b. Mansūr al-Tamīmī al-Sam'ānī al-Marwazī 1166 年没) のアラビア語著作を活用することによって新たな研究が可能であることは、拙稿においてたびたび示してきたところである。彼は 50 点以上にのぼる著作を残したことで知られているが、そのうち少なくとも 7 点の現存が確認されている。それらを徹底的に利用することが、メルヴおよびホラーサーンのウラマー研究を進展させるための一つの鍵であると筆者は考えている。

以上のような背景のもと、サムアーニーの著作を利用するための前段階の作業として、またメルヴのウラマー研究の一環として、サムアーニー自身に関する諸々の事柄について検討しておくことが必要である。彼のライフヒストリーやバックグラウンドとしてのサムアーニー家 (Bayt al-Sam'ānī) の歴史については、すでにサーリム (Sālim, Munīra Nāji) やムワフファク (Muwaffaq b. 'Abd Allāh b. 'Abd al-Qādir) 等が詳細な情報を提示し分析を加えている [Sālim 1975; Sālim 1976a; Muwaffaq 1996; al-Ziriklī 1996 4: 55]。また、サムアーニー著作の文献学的な情報、特に写本に関する情報についても、 Brockelmann (Brockelmann, C.) や Sellheim (Sellheim, R.) がある程度まとめている [Brockelmann 1937; Sellheim 1995]。しかし、それらの先行研究では、その後の研究の進展の結果として、情報量が不足している部分、あるいは修正が必要な部分も所々で見うけられる。

-
- 1) 他にサイド研究や概説も含めれば Aubin 1966; Bernheimer 2005; 森本 2006 などもある。なお筆者未見であるが、サムアーニー研究の先駆者サーリム (Sālim, Munīra Nāji) によるヒジュラ暦 6 世紀のホラーサーンのウラマーに関する研究書が近年出版されている [Sālim 2014]。
 - 2) この都市の名は、アラビア語ではマルウ、ペルシア語ではメルヴとカナ転写される。しかし本稿では通例に従い、全てメルヴと表記した。なお他の固有名詞については、著名なものを除き、全て正則アラビア語での読み方に従ってカナ転写する。
 - 3) サムアーニー研究以外でまとまったものとしては Rādfar 1372 Kh. が挙げられるのみであるが、それもまた研究というよりは、著名メルヴ出身ウラマーの紹介の域を出ていない。



地図 ホラーサーン地方と都市メルヴの位置
(図中の諸都市はサムアーニーが訪問したことがある場所)

そこで本稿では、サムアーニー研究のアップデートを目的として、筆者により得られた新知見を交えつつ、サムアーニー関連情報を改めて整理しておきたい。

I サムアーニーとサムアーニー家

I サムアーニー自身のライフヒストリー

サムアーニー、厳密に言えばアブー・サード・アブドゥルカリーム・ブン・ムハンマド・ブン・マンスール・アッタミーミー・アッサムアーニー・アルマルワズイーは、西暦12世紀前半にイスラーム世界の東部、特にホラーサーン地方で活躍したウラマーの一人であり、シャーフィイー派法学者、ハディース学者にして系譜学者である⁴⁾。ヒジュラ暦506年シャバーン月21日(西暦1113年2月10日月曜日)に、ホラーサーン地方の一都市メルヴにおいて、同地のウラマー名家の1つであるサムアーニー家の一員として生を享けた。サムアーニー家については後述する。なおサムアーニー家の構成員は全て《サムアーニー》ニスバで呼び表しうるが、本稿では、アブドゥルカリームのみを指してサムアーニーと呼ぶことにする。

わずか2歳の時に父ムハンマドに連れられてハディースの講習に参加したサムアーニーは、

4) 以下、本節で記すサムアーニーのライフヒストリーについては、Sellheim 1995; Sālim 1976aを参考にした。

父や二人のおじの指導のもとで、クルアーン、フィクフ、アラビア語、アダブといったイスラーム諸学の基礎を習得し、20歳に達しないうちにさらなる知識を求めてニーシャープールへと旅立った。その後、さらに遠方へと遊学を重ね、ヒジュラ暦529～538年（西暦1135～1143年）、540～546年（1145～51年）、549～552年（1154～1157年）の三度の長期遊学を通じて、西の方面ではレイ、イスファハーン、ハマダーン、バグダード、モスル、アレppo、ダマスカス、イェルサレム、メディナ、メッカ——彼はメッカ巡礼を二度行っている——など、北および東の方面ではホラズム、ブハーラー、サマルカンド、バルフ、ヘラートなど、要するにシリアからマー・ワラー・アンナフルにまで至るマシュリクの大半を旅して廻り、一説に7千人とも言われる数の、多くのウラマーと交流して、研鑽を積んだ。一方、故郷メルヴに戻れば、マドラサのムダッリス（「教授」）、シャーフィイー派のライース（「長」）、集会モスクにおけるハティープ（「説教師」）などの職をこなし、その合間に多くの著作を書き残したという。最終的に、彼は、ヒジュラ暦562年ラビーウ・アルアッワル月1日（西暦1166年12月26日月曜日）、故郷メルヴにおいて56年——西暦換算で53年——の生涯を終え⁵⁾、亡骸は同都市内のS-n-j-dhān墓地⁶⁾に埋葬された。

以上のような彼の経歴のうち、遊學歷、ハディース伝承における師、彼の著作、アーリムとしての立場や評価などについては、先行研究においてすでに網羅的、徹底的に検討されており、新たな研究を要する余地はほとんどないと言ってよい。しかしあえて問題を挙げるとすれば、先行研究では彼の広域に亘る遊学が注目されすぎるあまり、地元メルヴにおける活動が軽視されているという点があろう。以前拙稿にて論じた通り〔西村2009〕、サムアーニーの著作中に見える彼自身の移動記録からは、地元メルヴ地域の村々へとまめに足を運ぶ彼の姿が浮かび上がってくるのであり、地域社会に積極的に関わろうとする名士のアーリム像を見て取ることができる。またセルジューク朝のスルタン・サンジャル期の行政文書例文集『書記の敷居（*ʿAtaba al-Kataba*）』に収録されたサムアーニーに関連する文書からも、彼が地元メルヴで非常に重要な立場にあったことがわかる〔*ʿAtaba*: 87〕⁷⁾。これらの点は、先行研究ではほぼ等閑に付されており、今後のさらなる研究が必要とされる場所である。

5) ブロッケルマンは彼の没年をヒジュラ暦562年ラビーウ・アルアッワル月10日（西暦1167年1月5日）としているが、根拠不明である。史料——特にイブン・アルアスィール（Ibn al-Athīr 1233年没）の『完史（*al-Kāmil fī al-Taʾrikh*）』やイブン・カスィール（Ibn Kathīr 1373年没）の『始まりと終わり（*al-Bidāya wa al-Nihāya*）』などの年代記系のもの——のなかには没年をヒジュラ暦563年（西暦1167-8年）としているものもいくつかあるが、ここではサブキー（al-Subkī 1369年没）『シャーフィイー派の諸世代（大）（*Ṭabaqāt al-Shāfiʿīya al-Kubrā*）』の記述に従う〔T. Shāfiʿīya 7: 185〕。

6) この墓地の読み方は不明である。彼の亡骸がこの墓地に埋葬されたことを示す典拠は〔T. Shāfiʿīya 7: 185〕。現在のメルヴ遺跡スルタン・カラの北東の市壁外部、Yūsuf al-Hamadhānīモスクがあるあたりか〔cf. Muntakhab 2: 873〕。

7) アラビア語で書かれた先行研究では、『書記の敷居』のようなペルシア語史料は参照されていない。

2 サムアーニー家

サムアーニーの父母（次頁系図中の⑦⑮）はともにアーリムであった⁸⁾。母はサラフス——メルヴとニーシャープールの中に位置する都市——その近郊にあるザンダハーンという村で生まれ育ったようであるが、彼女の父、つまりサムアーニーの母方の祖父であるハサンはメルヴのライースを務めたほどの人物だったらしい。

ちなみに《サムアーニー》というニスバは、サムアーニー自身の説明によると、アラブのタミーム族の一族、サムアーン族の名にちなむという [Ansāb(2) 7: 222]。つまり彼らはアラブであった、あるいはアラブの出自を自称していたということになる⁹⁾。念のため補足しておく、サムアーニーのおじであるアブー・アルカースィム・アフマド（系図中の⑥）は、神の名前に関する解説書を流麗なペルシア語で書き残しており [Chittick 1995]、彼らが住んでいたメルヴの立地から考えても、サムアーニー家の人々は、当時のイラン世界の知識人が往々にしてそうであったように、アラビア語とペルシア語のバイリンガル・スピーカーであったと推測される¹⁰⁾。

メルヴにおけるサムアーニー家の活動は、サムアーニーの曾祖父であるアブー・マンスール・ムハンマド・ブン・アブドゥルジャッバル（系図中の①）から確認できる。カーディー（「法官」）として知られるこのムハンマドはハナフィー派法学を信奉していたが、彼の息子、つまりサムアーニーの祖父にあたるアブー・アルムザッファル・マンスール（系図中の③）は、ハナフィー派からシャーフイー派へと転向したという。この転向が原因で、マンスールはメルヴを離れざるをえなくなったようで、一時期ニーシャープールで暮らしていたらしい¹¹⁾。しかしその後、彼はメルヴへと戻り、同地のニザーミーヤ・マドラサのムダッリス職に就任したという。メルヴのウラマー社会におけるサムアーニー家の名声は、このマンスールによって礎が築かれた。

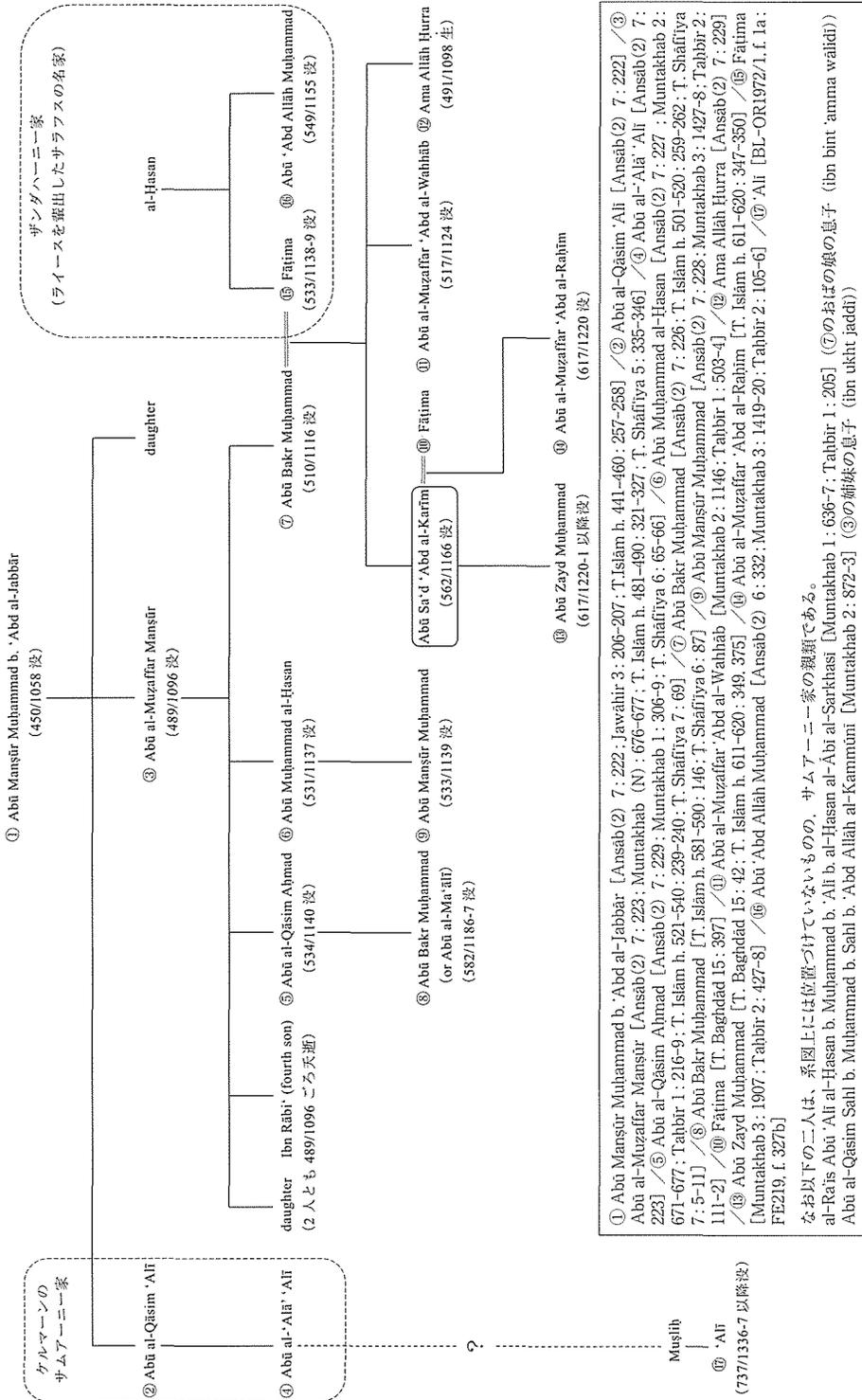
ハルム (Halm, H.) によれば、マンスールが亡くなった後、ニザーミーヤ・マドラサのムダッリス職は彼の息子のアブー・バクル・ムハンマド（系図中の⑦）、さらにはその息子のサムアーニーへと受け継がれていった [Halm 1974: 86-87]。なおサムアーニーは、これとは別にアミーディーヤ・マドラサのムダッリスでもあった。イブン・アルジャウズィー (Ibn al-Jawzī 1201 年没) の『諸王と諸共同体の歴史における整理されたるもの (*al-Muntaẓam fī Tawārīkh al-Mulūk wa al-Umam*)』の記述によれば、このマドラサはアミード・ホラーサーン (Amīd Khurāsān) という職名で知られるセルジューク朝の官僚の一人

8) 以下、本節で記すサムアーニー家の歴史については、主に Sālim 1976a を参考にし、系図中に示した一次史料も適宜参照した。

9) 正統カリフ時代からウマイヤ朝期にかけてのホラーサーンおよびメルヴへのアラブの移住については、さしあたって Sharon 1983: 49-71 を参照。

10) 比較事例として森本 2006 が参考になる。

11) ホラーサーン、特にニーシャープールにおけるハナフィー派とシャーフイー派の関係については、さしあたって Bulliet 1972: 28-46 を参照。



系図 サムアニー家

(Nāji Sālim 1976 を参考に、Ansāb (1), p. 5 および Halm 1974, p. 86 の系図を大幅に修正、増補)

——ムハンマド・ブン・マンスール・ブン・アンナサウィー (Muḥammad b. Maṣṣūr b. al-Nasawī) という人物——によって建設され、サムアーニーの父ムハンマドや彼の子孫のためにワクフ設定されていたという [Muntazam 10: 59]。このことはつまり、このマドラサにおけるムダッリスなどの有給の職が、サムアーニー家の人物だけに独占されていたことを意味するのであろう。従って、サムアーニー家の収入源の1つは、おそらくこのマドラサにおける俸給であった。ただし、サムアーニー自身はメルヴにおけるシャーフィイー派のライース職や、集会モスクのハティーブ職にも就いていたので、ムダッリス職の俸給以外にも収入源があったに違いない。また、サムアーニー家はメルヴ都市圏内の村々に私有地を有しており [西村 2009: 36]、そこからの収入も大きかったであろうと推測される。

このように四代に亘ってメルヴでの地盤を固めたサムアーニー家は、サムアーニー没後の西暦12世紀後半から13世紀初頭にかけても、同地での名声を保ち続けたようである。サムアーニーの息子アブー・ザイド・ムハンマド (系図中の⑬) はホラズムシャー朝君主アラウッディーン・ムハンマド ('Alā' al-Dīn Muḥammad b. Tekish 位1200~1220年) に仕え、使者としてバグダード (のおそらくアッバース朝カリフのもと) へ派遣されたことが知られている。またサムアーニーのもう一人の息子アブー・アルムザッファル・アブドゥッラヒーム (系図中の⑭) は父に連れられて各地を遊学しながらイスラーム諸学を修め、父没後にはメルヴのシャーフィイー派のライース職に就くなど、アーリムとして名を馳せた。彼から教えを受けた弟子の一人には、『諸国集成 (*Mu'jam al-Buldān*)』や『文人集成 (*Mu'jam al-Udabā'*)』の著者として有名なヤークート・アルハマウィー (Yāqūt al-Ḥamawī 1229年没) がいる。ヤークートは自身のメルヴ滞在中にサムアーニー家の私設書庫を利用しており [Gilliot 2002]、ここにサムアーニー家による同地での重要な学的貢献の一端を見て取ることができる。ウラマー名家としての同家の隆盛は、このアブドゥッラヒームの時代に一つの頂点に達したと言ってもよいかもしれない。しかし、そのアブドゥッラヒームがヒジュラ暦617年 (西暦1220年) に亡くなり、直後のヒジュラ暦618年 (西暦1221年) には、チンギス・ハンの息子トルイに率いられたモンゴル軍がメルヴへと到来して、住民の多くを殺害したうえ、町を徹底的に破壊してしまったことにより、メルヴの歴史は唐突に終わりを告げ、サムアーニー家もまた歴史の表舞台から消えていったのである。

以上がこれまでに知られているサムアーニー家の歴史の概要であるが、筆者の調査を通じて先行研究で言及されていないサムアーニー家に関連のありそうな情報が新たに得られたので、ささやかながらここに紹介しておきたい。

筆者はサムアーニー著作の写本調査の過程で、2つの写本の中に、『サムアーニー』ニスバを持つ人物を発見した。1つはミッレット図書館 (イスタンブル) 所蔵のザマフシャリー (al-Zamakhsharī 1144年没) 著クルアーン解釈書『啓示の真理を開示するもの (*al-Kashshāf 'an Ḥaqā'iq al-Tanzīl*)』であり、写本末尾の奥付部分に「アリー・ブン・ムスリフ・アッサムアーニー ('Alī b. Muṣliḥ al-Sam'ānī)」なる写本筆写者名が登場する [FE219: f. 327b]。

同部分ではヒジュラ暦737年(西暦1336-7年)にこの写本を筆写し終えたことが記されているので、この人物が14世紀頃に生きた人物であったことがわかる。もう1つの写本は、大英図書館(ロンドン)所蔵の『ヤミーニー史注釈(*Sharḥ Ta'riḫ al-Yamīnī*)』であり、写本冒頭に「アリー・ブン・ムスリフ・アッサムアーニー・アルキルマーニー('Alī b. Muṣliḥ al-Sam'ānī al-Kirmānī)」なる著者名が記されている[BL-OR1972/1:f.1a]¹²⁾。これら2写本中の《サムアーニー》ニスバを持つ人物は、「アリー・ブン・ムスリフ」という名前が共通していることから、同一人物であろうと推測される。なお大英図書館写本のほうでは《キルマーニー》という地名ニスバが付記されているが¹³⁾、系図にも示した通りサムアーニー家にはケルマーンに分家が存在したことが知られており、このこともまたこの「アリー・ブン・ムスリフ」がサムアーニー家の一員であった可能性を示す傍証になっている。今後、この人物についてさらなる情報収集が必要とされる。

II サムアーニーの著作と主著『ナサブの書』

I サムアーニーの著作の概要

本稿冒頭でも触れたように、サムアーニーは50点以上にのぼる著作を残したことで知られており、先行研究にてそれらのタイトルを確認することができる[Sālim 1976a: 38-40; Muwaffaq 1996: 38-46]。そのうち少なくとも以下に示す7点のアラビア語写本が現存していることがわかっている[Sellheim 1995]。

- ①『ナサブの書 (*Kitāb al-Ansāb*)』
- ②『大列伝中の選りすぐり (*al-Taḥbīr fī al-Mu'jam al-Kabīr*)』
- ③『シャイフ列伝からの抜き書き (*Muntakhab Mu'jam al-Shuyūkh*)』
- ④『バグダード史補遺 (*Dhāyil Ta'riḫ Baghdād*)』
- ⑤『口述と書取の心得 (*Adab al-Imlā' wa al-Istimlā'*)』
- ⑥『カーディーの心得 (*Adab al-Qāḍī*)』
- ⑦『シリアの美質 (*Faḍā'il al-Shām*)』

このうちサムアーニーの代表作である①については次節であらためて詳述する。②と③はサムアーニー自身の師に関する情報を収録した人名録である¹⁴⁾。記述様式や内容はほぼ同じで、現存していない『シャイフ列伝 (*Mu'jam al-Shuyūkh*)』の抜粋版だと考えられる。②では

12) この写本については British Museum 1883 3: 1040; British Museum 1894: 341 も参照のこと。

13) ただし『ヤミーニー史 (*Ta'riḫ al-Yamīnī*)』校訂本の校訂者であるユースフ・アルハーディー (Yūsuf al-Hādī) は「キルマーニー」ではなく「ルンマーニー (*al-Rummānī*)」だとする [T. Yamīnī: 176]。

14) ②③ともに校訂本が出版されている [Muntakhab; Taḥbīr]。②に関してはサーリムによる論考がある [Sālim 1974; Sālim 1976b (ただし後者は筆者未見)]。

1193名、③では(②の1193名を含む)1446名の人物が収録されている。③はトプカプ宮殿博物館図書館(イスタンブル)に存在する1写本¹⁵⁾が近年ようやく校訂されたことで利用が容易になった。サムアーニーと同時代(ないし一世代前)に生きたウラマーに関する情報を豊富に含んでおり、特にメルヴのウラマー研究において今後活用が期待できる史料である。④はハティーブ・アルバグダーディー(al-Khaṭīb al-Baghdādī 1071年没)著『バグダード史』の補遺¹⁶⁾、また⑦はいわゆる《ファダーイル(美質)》ジャンルに含まれる作品で¹⁷⁾、④⑦ともにサムアーニーの遊学先を主題とした地方史文献である。⑤は口頭でのハディースの伝承に関する手引書であり、サムアーニーのハディース学者としての知識が詰め込まれ、イスラーム世界における知の伝達方法の一端を伝える貴重な史料となっている¹⁸⁾。⑥は書名から考えてカーディー職に関する手引書であるが、未だ校訂本が出版されておらず利用困難であり、逆に言えば研究の余地が大いに残され、今後の研究が必要不可欠な史料である¹⁹⁾。

なお、現存していないが、サムアーニーの著作の一つに『メルヴ史(*Ta'rikh Marw*)』がある。『メルヴ史』とは、メルヴの歴史を主題とした地方史文献であり、単独の著者による一作品ではなく、同一主題を扱った複数の作品群の総称である²⁰⁾。筆者の調査によれば、サムアーニー以前にすでに8名のアーリムが同名の作品を各自執筆していた²¹⁾。そしてサムアーニーは、それら先行する『メルヴ史』をまとめ上げて「集大成的『メルヴ史』」あるいは「『メルヴ史』決定版」とも言えるような作品を企図したようである。イブン・ハッリカーン(Ibn Khallikān 1282年没)著『名士死亡録(*Wafayāt al-A'yān*)』の記述によれば、

- 15) 写本番号は Aḥmad al-Thalīth 2953。298葉。詳細は Muntakhab の校訂者序文を参照のこと。
 16) サーリムによればイギリスとオランダにそれぞれ1写本が現存しているという [Taḥbīr 1: 31]。
 17) Brockelmann S I: 565 に写本情報がある。校訂本の書誌情報は以下の通り: al-Sam'ānī, *Faḍā'il al-Shām*, ed. 'Amr 'Alī 'Umar, Dimashq: Dār al-Thaqāfa al-'Arabiya, 1992。
 18) トルコ・イスタンブルのミレット図書館に1写本が現存している。写本番号は Feyzullah Efendi 1557。161葉。この写本から校訂本が出版されている [Adab]。[Abd al-Amīr Shams al-Dīn n. d.] はこの作品の研究書。
 19) エジプト・カイロのアズハルに2写本が残されているという [Muntakhab 1: 39; Taḥbīr 1: 31]。写本番号は 10812 (639) および 13184 (1711) で、それぞれ 185葉と 189葉。サウジアラビア・メディナに別な1写本が存在するという情報もあるが、現在調査中につき詳細は不明。
 20) なお筆者は日本オリエント学会第50回大会(2008年11月2日、筑波大学)にて「『メルヴ史』解題——12世紀以前のものを中心に——」と題した発表を行った。
 21) 8名の名前は以下の通り。

① Abū al-Ḥasan Aḥmad b. Sayyār b. Ayyūb al-Marwazī (268/881年没); ② Abū Rajā' Muḥammad b. Ḥamdawayh b. Aḥmad al-Sinjī al-Hūrqānī (306/918年没); ③ Abū 'Abd al-Raḥmān 'Abd Allāh b. Maḥmūd al-Sa'dī (9~10世紀); ④ Abū al-Faḍl al-'Abbās b. Muṣ'ab b. Bishr (9~10世紀); ⑤ Abū al-'Abbās Aḥmad b. Sa'īd b. Aḥmad b. Muḥammad b. Ma'dān al-Faqīh al-Ma'dānī al-Azdī (375年/986年没); ⑥ Abū Zur'a al-Sinjī (or Abū Zur'a al-Musabbīhī) (9~10世紀); ⑦ Abū Šāliḥ Aḥmad b. 'Abd al-Malik b. 'Alī al-Mu'adhhdhīn al-Naysābūrī (470/1078年没); ⑧ Abū Muḥammad 'Abd al-Jabbār b. 'Abd al-Jabbār b. Muḥammad b. Thābit b. Aḥmad al-Thābitī al-Kharāqī (553/1158年没)

これらの『メルヴ史』については、いずれ別稿にて詳述する予定である。

サムアーニーの『メルヴ史』は20冊を超える大著であったという [Wafayāt 3: 210]²²⁾。『ナサブの書』の冊数は8冊程度であったというから、彼の『メルヴ史』がいかに大部な本であったかがわかる。

残念ながら、このサムアーニーの作品を含む全ての『メルヴ史』は、長い時間を経て全て散逸してしまっている。しかし、彼によって『メルヴ史』執筆のために集められたメルヴ関連情報は、別な形で残されることになった。彼の『ナサブの書』には、例えば以下のような形で、他の『メルヴ史』からの逸文が残されている [Ansāb(2) 1: 125]。

アブー・ムハンマド・アフマド・ブン・ムハンマド・ブン・アフマル・アルアフマリー・アルマルワズィー (Abū Muḥammad Aḥmad b. Muḥammad b. Aḥmar al-Aḥmarī al-Marwazī)。彼〔のニスバであるアフマリー〕は彼の祖先〔のアフマル〕に関係づけられる。メルヴの人々に含まれる。アブー・ズルア・アッスィンジー (Abū Zur'a al-Sinjī) が『メルヴ史』の中で彼について語って言ったところでは、〔彼 (上記アフマド) は文法学者で『クルアーンの意味 (Ma'āni al-Qur'ān)』の暗誦者であり (kāna nahwīyan ḥāfīzan li-ma'āni al-Qur'āni), 〔メルヴの〕スィンジュ [村] 出身であった。〔下線は筆者による。〕

このような逸文の存在もまた、『ナサブの書』がメルヴ・ウラマー研究にとっての一級の史料であることを証言している。先行研究においてはこういった『メルヴ史』逸文の収集と分析は手つかずのまま残されており、そのような作業を通じて従来とは異なる新たな視点からメルヴ・ウラマー社会像の一端を明らかにできるのではないかと筆者は考えている。

2 『ナサブの書』の概要

サムアーニーの代表作である『ナサブの書』は、ムスリム、特にウラマーの名前に含まれるニスバを4461個収録し、その派生源について説明したアラビア語人名辞典である²³⁾。ニスバとはアラビア語文法で言う「関係の名詞 (al-asmā' al-mansūba)」のことであり、派生源である単語に語尾ī —— 厳密には-īyyun —— を付することによって形成され、人または事物が起源、血統、出自、派閥、職業などに関して派生源の語の意味するものに所属または関連していることを表す。この「関係の名詞」が人物に用いられ、その結びつきの強さのた

22) この冊数から判断して、サムアーニーの『メルヴ史』は、ハティーブ・アルバグダーディーの『バグダード史』やイブン・アサーキル (Ibn 'Asākir 1176年没) の『ダマスカス史 (Ta'rikh Madīna Dimashq)』のような、内容の大半が人名録記事で構成された所謂「地方史人名録」であったに違いない。

23) ゼルハイムは『ナサブの書』に5348個のニスバが収録されていると指摘するが [Sellheim 1995], これは明らかに間違いである。この5348という数は、同書ハイデラバード版校訂本 [Ansāb(2)] において各ニスバに振られている通し番号の最終番号に基づいているが [13: 540], この番号には誤りが間々見られ、特に《ナルマキー》(al-Narmaqi 通し番号4099番) と《ナリーズィー》(al-Narizi 通し番号5000番) の間で901もズレが生じてしまっているため [13: 78], 全く意味をなしていない。

めに事実上その人物の名前の一部となったものがニスバである。ニスバについて説明した人名辞典は、サムアーニーのもの以前にもいくつか執筆されているが²⁴⁾、ニスバのみをこれほど大量に扱っているという点において、同書は他の人名辞典と一線を画した特異な文献である²⁵⁾。

従来の歴史研究において、同書は、各ニスバの派生源を確認するための辞典として、あるいはニスバ順に掲載されたウラマーの伝記情報を確認するためのウラマー人名録として参照されてきた。つまりこの文献の本来の執筆意図に沿って、史料としてというよりはむしろ研究をサポートする工具として利用されてきた。また地名ニスバに限って言えば、地理書に記されていない貴重な地誌情報を含んでいることもあり、早くから歴史研究者によって研究に利用されてきた。特にホラーサーン地方に関しては情報量が豊富であり、古くはジュコフスキー (Zhukovskii, V. A.) やバルトリド (Barthold, W.) が、最近ではカマーリッディーノフ (Kamaliddinov, Sh. S.) がそのような情報を研究に活用している [Zhukovskii 1894; Barthold 1968; Kamaliddinov 1993]。筆者自身もまた、同書を利用して主にホラーサーン地方を対象とした歴史研究を続けている [Nishimura 2008; 西村 2009, 2014]。

ニスバというものの性質から考えて、それらを大量に収録した同書の記述を網羅的に注意深く分析することにより、12世紀以前のイスラーム世界におけるウラマーの帰属意識や他者認識、さらには彼らの社会構造の一端を解明することが可能であろう。知見の限りにおいてそのような研究は未だ見当たらないが、同書にはそれを可能にする史料としてのポテンシャルがあり、今後なされてしかるべきである²⁶⁾。

しかし『ナサブの書』をこれまで以上に積極的かつ網羅的に活用するためには、校訂本のみならず写本の利用、また写本そのものの研究も必要である。稿末の参考文献表に記載の通り、『ナサブの書』の既刊校訂本は4種類ある。そのうち最も信頼できるものはハイデラバード版13巻本であるが、同版の校訂のために参照された写本は4種類であり²⁷⁾、世界各地に少なくとも31あるとみられる写本の一部を利用しているにすぎない。しかも校訂本で参照されていない写本のいくつかは、校訂本で参照された写本より古い時代に作成されたものなのである。それゆえ『ナサブの書』の利用にあたっては、厳密を期すならば、写本間の文章の異同を逐語的に確認しながらサムアーニーによるオリジナルの文章を推定していく必

24) イブン・アルカイサラニー (Ibn al-Qaysarānī 1113-4年没) の『同音異義のナサブの書 (Kitāb al-Ansāb al-Muttafiqa)』がその一例。ニスバを含む人名全般の辞典も少なからず存在した [Ikmāl 1: wāw-lām]。

25) なお Lubāb ;Lubb は後世に編まれた『ナサブの書』の要約版であり、ニスバ辞典としての同書の影響の大きさが窺われる。

26) 西村 2005 はそのような試みのささやかな一例である。

27) ハイデラバード版13巻校訂本を改訂したペイルート版12巻校訂本では、追加でアヤソフィヤ (イスタンブル) 所蔵写本やザーヒーリーヤ図書館 (ダマスカス) 所蔵写本などを利用したことが記されているが [Ansāb (3) 7: 5-6; 9: 9; 10: 5; 12: 5]、それらの写本情報を明記しておらず、今一つ信頼性に欠いている。

要がある。

3 『ナサブの書』写本の所蔵状況、およびテキスト校訂上の問題

『ナサブの書』写本の現存状況に関しては、ブロッケルマンによってまとめられた情報以外には先行研究がなく、それすらも全く不十分である。従って世界各地の図書館の写本カタログを丹念に確認することを通じて、情報をアップデートしていかねばならない。筆者はすでにこの作業に取り組んでおり、現在までに得られた情報は次頁の表のようにまとめられる。この表で示しているように、現時点で筆者が把握している限りにおいて『ナサブの書』写本は世界に31種類存在する。

ハイデラバード版13巻校訂本では、校訂に際して表中の1番の大英図書館（ロンドン）所蔵写本、7番のキョプリュリュ図書館（イスタンブル）所蔵写本——この写本を底本とした——、10番のゲース・アクバル図書館²⁸⁾（ロシア）所蔵写本、17番のオスマニア大学図書館（ハイデラバード）所蔵写本の4写本が利用された。この4種のうち3種は最初から最後までが1冊の本にまとめられている完全版であり、それらの写本の筆者時期の古さから考えても、それらを選んだ校訂者ムアッリミー（al-Mu'allimi）の判断は正しい。

しかし、この表からわかるように、『ナサブの書』写本の写本形態は、全てが完全版というわけではなく、何冊か——おそらく8冊——に分かれる形で作成された分冊の形態を採るものもあった。そして表中24番のスレイマニエ図書館（イスタンブル）所蔵写本、その写本の奥付 [f. 187a] には、ヒジュラ歴633年サファル月23日、すなわち西暦1235年11月7日に筆写作業が終わった旨が記されていることから、このような分冊形態の写本のほうが完全版よりも古い写本である可能性が高いことがわかるのである。ハイデラバード版ではこの種の分冊版を校訂に利用していないため、ところによっては記述を写本レベルで再検討すべき箇所も存在する。

以下にテキスト校訂上の問題の一例を示そう。『ナサブの書』に収録された《スィーナニー》ニスバの説明の中で、アブー・アブドゥッラーフ・アルファドル・ブン・ムーサー・アッスィーナニー（Abū 'Abd Allāh al-Faḍl b. Mūsā al-Sinānī 806-7 or 807-8年没）なるメルヴの聖者の逸話が掲載されており、その一部に次のような一節がある [Ansāb (2) 7: 357]。

彼（ファドル）の墓はスィンジユから近いラーマーシャーフ（Rāmāshāh）という村にあるのだが、[その村に彼の墓があった理由は] 人々が彼に着せた無実の罪によって彼がスィーナニー村を出てその村（ラーマーシャーフ）に住んでいたからである。これについての逸話は以下のようなものである。すなわち、その村（スィーナニー村）は彼のもとへ知識を求めて諸国からやってきたよそ者たちのせいで疲弊していた（wa al-

28) この図書館については現在調査中につき詳細不明。

表『ナサブの書』写本所在情報

所蔵国	所蔵場所	所蔵番号	葉数、書写年など	典拠および備考
1 イギリス	British Museum	AC1286 (ADD23355)	603葉。完全版。17-18世紀ごろのものと同定。	Brockelmann GI: 330 ; SI: 565/Ansāb (1) はこの写本のファクシミリ版。
2 イラン	Ketābkhāne-ye Dāneshgāh-e Tehrān	8500	485葉。完全版。h. 1205年書写。	Derāvātī 2010 2: 190 / Derāvātī 2012 5: 16/Ketābkhāne-ye Dāneshgāh-e Tehrān 17: 148
3 イラン	Ketābkhāne-ye Mellī-Malek	3657	482葉。完全版。h. 1302年書写。	Derāvātī 2010 2: 191/Derāvātī 2012 5: 16/Ketābkhāne-ye Mellī-Malek 1: 62
4 イラン	Ketābkhāne-ye Markazī-ye Āstān-e Qods-e Razāvī	3590	458葉。完全版。h. 11世紀のものと同定。	Derāvātī 2010 2: 190/Derāvātī 2012 5: 15/Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Razāvī 27: 76
5 インド	Patna ?	Patna I. 304. 210	完全版。詳細不明。	Brockelmann GI: 330
6 シリア	Dār al-Kutub al-Zāhiriya	7822	457葉。完全版。h. 1125年書写。	Dār al-Kutub al-Zāhiriya 2: 72-3
7 トルコ	Köprülü Yazma Eser Kütüphanesi	Pazıl Ahmed Paşa 1010	482葉。完全版。h. 915年書写。	Brockelmann GI: 330 ; Ansāb (2) 1: 33
8 トルコ	Süleymaniye Kütüphanesi	Hacı Beşir Ağa 445	598葉。完全版。h. 1123年書写。	Brockelmann GI: 330
9 トルコ	Millet Yazma Eser Kütüphanesi	Faizullah Efendi 1386	639葉。完全版。h. 1209年書写。	Brockelmann SI: 565
10 ロシア	Ghūth Akbar Library ?	Ghūth Akbar OR361J	470葉。完全版。	Ansāb (2) 1: 33-34
以上が完全版の写本。				
11 イギリス	British Museum	AC345 (ADD7352)	336葉。後半部欠落。17-18世紀ごろのものと同定。	Brockelmann GI: 330
12 イギリス	Cambridge University Library	Supplement 1010 (a) / Or. 927 (12)	157葉。後半部欠落。	Brockelmann SI: 565 ; Cambridge University Library: 166
13 イラン	Ketābkhāne-ye Omūmi-ye Āyatollah al-'Ozmā Mar'ashi Najafi	1889	322葉。h. 11世紀のものと同定。前部および後半部欠損。al-Shārabādī以降。	Derāvātī 2010 2: 190/Derāvātī 2012 5: 15/Ketābkhāne-ye Āyatollah Mar'ashi 5: 264
14 イラン	Ketābkhāne-ye Markazī-ye Āstān-e Qods-e Razāvī	22272	255葉。h. 11世紀末のものと同定。hā'からsinの最後まで。	Derāvātī 2010 2: 190/Derāvātī 2012 5: 15/Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Razāvī 27: 73
15 イラン	Ketābkhāne-ye Markazī-ye Āstān-e Qods-e Razāvī	22289	245葉。h. 11世紀末のものと同定。上記22272写本の続きから kafの真ん中まで。	Derāvātī 2010 2: 190/Derāvātī 2012 5: 15/Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Razāvī 27: 74
16 イラン	Ketābkhāne-ye Markazī-ye Āstān-e Qods-e Razāvī	22327	194葉。h. 11世紀末のものと同定。上記22289写本の続きから最後まで。	Derāvātī 2010 2: 190/Derāvātī 2012 5: 16/Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Razāvī 27: 75

表 『ナサブの書』写本所在情報 (続き)

所蔵国	所蔵場所	所蔵番号	葉数、書写年など	典拠および備考
17 イラン	Ketabkhāne-ye Markāzi-ye Āstān-e Qods-e Razavi	27902	:408葉。h.11世紀(h.12世紀?)のものとの推定。zāから最後まで。	Derayati 2010 2: 190/Derayati 2012 5: 16/Keta bkhāne-ye Āstān-e Qods-e Razavi 27: 75
18 インド	Maktaba al-Jami'a al-Uthmaniya	q922-97/1-s	:239葉。一部欠落。	: Ansāb (2) 1: 34
19 インド	Khuda Bakhsh Oriental Public Library	646	:389葉。14世紀ごろのものとの推定。	: Khuda Bakhsh Oriental Public Library XII: 1-2
20 オランダ	Leiden University Library	Or: 3057	:249葉。分冊本(第5巻のみ)。13世紀ごろのものとの推定。	: Library of the University of Leiden: 15
21 トルコ	Millet Yazma Eser Kütüphanesi	Fezullah Efendi 1385	:199葉。後半部欠落。	: Brockelmann SI: 565
22 トルコ	Süleymaniye Kütüphanesi	Ayasofya 2976	:10葉。分冊本(第1巻のみ)。11葉目以降欠落。	: Brockelmann GI: 330 ; SI: 565
23 トルコ	Süleymaniye Kütüphanesi	Ayasofya 2980	:232葉。分冊本(第5巻のみ)。	: Brockelmann GI: 330 ; SI: 565
24 トルコ	Süleymaniye Kütüphanesi	Turhan Valide Sultan 244	:235葉。分冊本(第8巻のみ)。h.633年書写。	: Brockelmann GI: 330
25 トルコ	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	A2938-2	:249葉。分冊本(第2巻のみ)。	: Brockelmann SI: 565/Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 3: 499
26 トルコ	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	A2938-3	:251葉。分冊本(第3巻のみ)。	: Brockelmann SI: 565/Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 3: 500
27 トルコ	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	A2938-4	:191葉。分冊本(第4巻のみ)。	: Brockelmann SI: 565/Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 3: 500
28 トルコ	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	A2938-7	:236葉。分冊本(第7巻のみ)。	: Brockelmann SI: 565/Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 3: 501
29 トルコ	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	M489	:276葉。分冊本(第6巻のみ)。	: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 3: 500
30 フランス	Bibliothèque Nationale	5874	:228葉。分冊本(第4巻のみ)。h.783年書写。	: Brockelmann SI: 565 ; Bibliothèque Nationale: 131
31 フランス	Bibliothèque Nationale	5888	:321葉。分冊本(第1巻のみ)。13世紀ごろのものとの推定。	: Brockelmann SI: 565 ; Bibliothèque Nationale: 135

以上が欠損のある写本、ないし分冊版の写本。

※本表は現時点で筆者が実際に複写を入手した写本、ないし筆者が確実と判断した情報をもとに作成された。なおインドおよびロシアには上記以外の写本が所蔵されている可能性がある。

qiṣṣatu fī dhālika anna al-qaryata dāqat ‘an-man kāna yaqṣidu-hu min al-ghurabā’ min al-bilādi li-ṭalabi al-‘ilmi。～以下略～（下線は筆者による。）

下線部分の min al-bilād（「諸国から」）という表現は、ハイデラバード版の底本であるキョブリュリュ図書館所蔵写本（表中7番）の記述 [f. 248b] に従って校訂されたものである²⁹⁾。しかしハイデラバード版の脚註6にあるように、この部分は大英図書館所蔵写本（表中1番）では wa al-baladiyyīn（「町の人たち」ないし「地元の人たち」）と記されている³⁰⁾。そしてハイデラバード版が校訂に利用しなかった分冊版2種類——スレイマニエ図書館所蔵写本（表中23番）[f. 14a] とライデン大学図書館所蔵写本（表中20番）[f. 16a]——においても、その両方ともで wa al-baladiyyīn と記されているのである。つまりこの部分は本来「その村は彼のもとへ知識を求めてやってきたよそ者たちや地元の者たちのせいで疲弊していた」という文章であった可能性が高いのである。

ちなみに、この部分で「よそ者」を意味するグラバー（ghurabā 単数形 gharib）と「地元民」を意味するバラディーユーン（baladiyūn）という両単語が並列されていたとすれば、この部分はサムアーニーの抱いた《よそ者》観を理解するための一つの手がかりになると考えられる³¹⁾。おそらくサムアーニーは、アーリム各人がある特定の地域社会に帰属していると考えており、それと表裏一体的に、ある特定の地域社会に一時滞在した外来者を「よそ者」と認識していたようである³²⁾。まさにこの部分も、彼のそのような《よそ者》観を示唆する一例と言えよう。この点については、いずれ改めて詳細に論じたいと筆者は考えている。

結びにかえて —— サムアーニーの魅力 ——

最後にサムアーニーの著作から文章を二つ引用して、雑駁な本稿を締めくくりにした。一つ目は『ナサブの書』より [Ansāb(2) 13: 229]。

ニヤーザキー（al-Niyāzaki）：～中略～ このニスバは、私（サムアーニー）の考えでは、[マー・ワラー・アンナフル地方の] キシュとナサフの〔町の〕間にある、ニヤーザー（Niyāzā）と言われる大きな村〔の名前〕にちなむ。私はその村に、雪と寒さと困難のなか、1晩滞在した（bittu bi-hā laylatan fī thaljīn wa bardīn wa shiddatin）。

29) ちなみにベイルート（5巻本）版では mārīn（「放浪者たち」）と校訂されているが根拠不明である [Ansāb(4) 3: 365]。

30) 同脚註によればゲース・アクバル図書館所蔵写本（表中10番）でもこのように書かれているという。

31) 中世イスラーム世界における《よそ者》ないし《異人》については、Rosenthal 1997; 西村 2013 を参照。

32) なお筆者は平成22年度九州史学会大会イスラーム文明学部会（2010年12月12日、九州大学）にて「12世紀ホラーサーンにおけるウラマーの《よそ者》観 —— サムアーニーの記述を手掛かりに ——」と題した発表を行った。[西村 2011] はその成果の一部である。

この一文には、彼がマー・ワラー・アンナフル地方のニヤーザー村を訪問したことが記録されている。サーリムによれば、この訪問はヒジュラ暦 551 年ごろ（西暦 1156-7 年ごろ）のことであったという。つまり彼が 43 歳ぐらいだったときの記録ということになる。この飾り気のない、何気ない村落訪問記録は、内容的には、人名辞典である『ナサブの書』の本来の趣旨から大きくかけ離れたものである。百歩譲ってハディース伝承における伝承場所の提示を意図したものであるとしても、「雪と寒さと困難のなか」という表現を記録する必要性は全くない。しかし、旅行記的でどこか文学的でもあるこの記録は、壮年の男性アーリムが中央アジア——現ウズベキスタン——の雪景色の村を苦勞しながら歩く様子を想像させ³³⁾、読者の旅情をかきたてる。

二つ目は『シャイフ列伝からの抜き書き』より [Muntakhab 3: 1640-1642; Taḥbir 2: 247-249]。

アブー・アルファドル・ムハンマド・ブン・ヒバトゥッラーフ・ブン・アルアラーウ・ブン・アブドゥルガッファール・アルブルージュルディー・アルハーフィズ (Abū al-Faḍl Muḥammad b. Hiba Allāh b. al-'Alā' b. 'Abd al-Ghaffār al-Burūjirdī al-Hāfiẓ)。ブルージュルドの人々の一人である。～中略～ 私 (サムアーニー) が彼と初めて会ったのは、私がブルージュルドの集会モスク内で坐ってハディースを書写していた時だった。みずばらしい格好をしたシャイフ (shaykhun 'alay-hi hay'atun raththatun) が入ってきて、私に挨拶をして坐った。そこで私も [彼に挨拶を] 返し、[その後] 彼は沈黙した。しばらくして、彼が私に言った：「何を書いているのですか？」私は彼に答えるのを嫌に思い、「この質問が彼にとってどんな意味を持つというのだ。」と心の中で言った。そして苛立ちながら「ハディース。」と答えた。すると彼は言った：「あなたはハディースを探求しているのでしょうか？」私は「ええ。」と言った。[つづいて] 彼は「どこのご出身ですか？」と言ったので、私は「メルヴの出です。」と言った。すると彼は言った：「[真正集の著者である、かの] ブハーリー (al-Bukhārī) はメルヴの人々の中で誰からハディースを伝え聞きましたか？」私は言った：「アブダーン ('Abdān) とサダカ (Ṣadaqa) とアリー・ブン・フジュル ('Alī b. Ḥujr)³⁴⁾、その世代に含まれる人々です。」[それを聞いて] 彼は言った：「アブダーンの名前 (イスマ) は何ですか？」³⁵⁾ 私は言っ

33) この村落訪問には彼の息子のアブドゥッラヒームが同行していた可能性もある。アブドゥッラヒームは当時 13~14 歳ぐらいの青年であった。

34) アブダーンは Abū 'Abd al-Raḥmān 'Abd Allāh b. 'Uthmān b. Jabala al-Marwazī (835-6 年没) [T. Kabīr 5: 147]、サダカは Abū al-Faḍl Ṣadaqa b. al-Faḍl al-Marwazī (835~840 年ごろ没) [T. Kabīr 4: 298; Ansāb (2) 8: 290]、アリー・ブン・フジュルは Abū al-Ḥasan 'Alī b. Ḥujr al-Marwazī al-Sa'dī (858-9 年没) [T. Kabīr 6: 272; Ansāb (2) 7: 143] を指す。

35) 実はメルヴにはアブダーンと呼ばれた人物が他にもいたようで [Ansāb (2) 9: 180-182]、このシャイフはそのことを知った上で、サムアーニーの知識を試すためにわざとこの質問を投げかけたと推測される。

た：「アブドゥッラーフ・ブン・ウスマーン・ブン・ジャバラ（‘Abd Allāh b. ‘Uthmān b. Jabala）。」彼は〔畳み掛けて〕言った：「彼はなぜアブダーンと言われたのですか？」そこで私は〔話を〕止めた。彼は微笑んだ。私は彼を〔それまでとは〕ちがった目で見て、言った：「シャイフが彼のことを語るでしょう。」そこで彼は言った：「彼のクンヤはアブー・アブドゥッラフマーン（Abū ‘Abd al-Rahmān）で、彼のイスマはアブドゥッラーフ（‘Abd Allāh）です。クンヤとイスマを通じて2つのアブド（‘Abd）が結集した。それゆえに彼はアブダーン（「2つのアブド」を意味するアラビア語双数形）と言われたのです。」私はこの僥倖を喜び（faraḥtu bi-hādhihi al-fā‘idati）、彼に言った：「あなたは誰からそれを聞いたのですか？」彼は言った：「アブー・アルファドル・ムハンマド・ブン・ターヒル・アルマクディシー（Abū al-Faḍl Muḥammad b. Tāhir al-Maqdisi）から。」そしてこの後、私は彼から、彼のハディースとして私が選定したところのハディース数冊分を書き取った（thumma ba‘da dhālika katabtu ‘an-hu aḥādītha min ajzā’in intakhabtu-hā ‘alay-hi）。

この文章では、彼がブルージルドにおいて一人の師と出会った経緯が事細かく語られており、師の人となりを詳細に語ろうとする彼のハディース学者としての義務感を感じ取ることができる。しかしそれにも増して、この文章に見られる一人称の語り口や彼の率直な心境の吐露などからは、自伝的で文学的な味わいが強く感じられる。そして短く鋭い会話の応酬による緊張感と臨場感、異郷の地で見ず知らずの人物から話しかけられた時の困惑、一期一会とでも言うべき師との運命的な出会いによる高揚感、そういった様々な感覚や感情がひしひしと伝わってくるこの文章は、読者と彼との距離を時空を超えて近づけてくれるようであり、研究を抜きにしてただ読んでいて十分に面白い。

サムアーニーの著作中において、以上で紹介した二つの文章のような、純粋に学問的な内容とは少々趣の異なる記述に遭遇することは稀である。しかし、ふと現れるこうした文章から、アーリムとしてでない、一人間としての彼の素顔が垣間見られ、それが筆者の心をとらえて離さないのである。もちろんアーリムとしての業績、著作物があるからこそ、現代の研究者らによって彼に関する研究が進められているのであるが、上述のような彼の人間的な側面もまた、研究へと誘う彼の魅力の一端なのではなからうか。

追記 なお本稿は「財団法人三島海雲記念財団 平成22年度学術研究奨励金」, 「人間文化研究機構 (NIHU) プログラム イスラーム地域研究」, 「JSPS 科研費 24401013 (研究代表: 桜井啓子)」の助成により得られた研究成果の一部である。

参考文献

写本

BL-OR1972/1 : British Library OR1972/1 (早稲田大学所蔵 Microfiche 22289), 'Alī b. Muṣliḥ al-Sam'ānī al-Kirmānī, *Sharḥ Ta'riḥ al-Yamīnī*.

FE219 : Millet Yazma Eser Kütüphanesi Faizullah Efendi 219, Abū al-Qāsim Jār Allāh Maḥmūd b. 'Umar al-Zamakhsharī, *al-Kashshāf 'an Haqā'iq al-Tanzil*, Scribe 'Alī b. Muṣliḥ al-Sam'ānī. 上記以外で利用した『ナサブの書』写本については別表を参照のこと。

校訂本

Adab : al-Sam'ānī, *Kitāb Adab al-Imlā' wa al-Istimlā'*, ed. Max Weisweiler. Leiden : E. J. Brill, 1952.
Ansāb (1) : al-Sam'ānī, *Kitāb al-Ansāb*, with an introduction by D. S. Margoliouth, E. J. W. Gibb Memorial series vol. 20. Leiden & London : E. J. Brill & Luzac, 1912.

Ansāb (2) : al-Sam'ānī, *al-Ansāb*, ed. 'Abd al-Raḥmān b. Yaḥyā al-Mu'allimī al-Yamānī et al., 13 vols. Haydarābād : Maṭba'a Majlis Dā'ira al-Ma'ārif al-'Uthmāniya, 1962-82.

Ansāb (3) : al-Sam'ānī, *al-Ansāb*, ed. 'Abd al-Raḥmān b. Yaḥyā al-Mu'allimī al-Yamānī, Muḥammad 'Awwāma et al., 12 vols. Bayrūt : Muḥammad Amin Damaj, 1980-84.

Ansāb (4) : al-Sam'ānī, *al-Ansāb*, ed. 'Abd Allāh 'Umar al-Bārūdī, 5 vols. Bayrūt : Dār al-Jinān, 1988. (なお現在では index 付の 6 巻本も出版されている。)

Ansāb (5) : al-Sam'ānī, *al-Ansāb*, ed. Muḥammad 'Abd al-Qādir 'Aṭā, Bayrūt : Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 6 vols. 1998.

'Ataba : Muntajab al-Dīn, *'Ataba al-Kataba*, eds. Moḥammad Qazvinī & 'Abbās Iqbāl. Tehrān : Sherkat-e Sehāmī-ye Chāp, 1329Kh.

Ikmāl : Ibn Mākūlā, *al-Ikmāl fī Raf' al-Irtiyāb*, ed. 'Abd al-Raḥmān b. Yaḥyā al-Mu'allimī al-Yamānī, 7 vols. Bayrūt : Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 1990.

Jawāhir : Ibn Abī al-Wafā' al-Qurashī, *al-Jawāhir al-Muḍīya fī Ṭabaqāt al-Ḥanafīya*, ed. 'Abd al-Fattāḥ Muḥammad al-Ḥilw, 5 vols. Jīza : Hajr, 1993(2nd ed.).

Lubāb : Ibn al-Athīr, *al-Lubāb fī Taḥdhīb al-Ansāb*, 3 vols. Bayrūt : Dār Ṣādir, 1980.

Lubb : al-Suyūṭī, *Lubb al-Lubāb fī Tahrīr al-Ansāb*, 2 vols. Bayrūt : Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 1991.

M. al-Buldān : Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-Buldān*, ed. Farīd 'Abd al-'Azīz al-Jundī, 7 vols. Bayrūt : Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 1990.

Muntakhab : al-Sam'ānī, *al-Muntakhab min Mu'jam Shuyūkh*, ed. Muwaffaq b. 'Abd Allāh b. 'Abd al-Qādir, 4 vols. al-Riyād : Dār al-'Ālam al-Kutub, 1996.

Muntakhab (N) : Abū Ishāq Ibrāhīm al-Ṣarīfīnī, *al-Muntakhab min al-Siyāq*, ed. Moḥammad Kāzem al-Maḥmūdī. Qom : Jamā'a al-Mudarrisīn fī al-Ḥawza al-'Ilmiya, 1362Kh.

Muntaẓam : Ibn al-Jawzī, *al-Muntaẓam fī Tawāriḥ al-Mulūk wa al-Umam*, ed. Suhayl Zakkār, 13 vols. Bayrūt : Dār al-Fikr, 1995-96.

T. Baghdād : al-Khaṭīb al-Baghdādī, *Ta'riḥ Baghdād*, 15 vols. Bayrūt : Dār al-Kutub al-'Ilmiya, 1980-1986.

- T. Kabir : al-Bukhārī, *al-Ta'rikh al-Kabir*, 9 vols., Bayrūt : Dār al-Kutub al-Ilmiya, 1986.
- T. Islām : al-Dhahabī, *Ta'rikh al-Islām wa Wafayāt al-Mashāhīr wa al-A'lām*, ed. 'Umar 'Abd al-Salām Tadmurī, 53 vols. Bayrūt : Dār al-Kitāb al-'Arabī, 1987-2004.
- Ṭ. Shāfi'īya : al-Subkī, *Ṭabaqāt al-Shāfi'īya al-Kubrā*, ed. Maḥmūd Muḥammad al-Ṭanāḥī & 'Abd al-Fattāḥ Muḥammad al-Ḥilw, 10 vols. al-Qāhira : Dār Iḥyā' al-Kutub al-'Arabīya, 1964.
- T. Yamīnī : al-'Utībī, *al-Yamīnī*, ed. Yūsuf al-Hādī, Tehrān : Markaz-e Pazhūheshī-ye Mirāth-e Maktūb, 1387Kh.
- Taḥbīr : al-Sam'ānī, *al-Taḥbīr fī al-Mu'jam al-Kabir*, ed. Munīra Nāji Sālim, 2 vols. Baghdād, 1975.
- Wafayāt : Ibn Khallikān, *Wafayāt al-A'yān wa Anbā' Abnā' al-Zamān*, ed. Iḥsān 'Abbās, 8 vols. Bayrūt : Dār Ṣādir, 1977.

写本カタログ等

- Brockelmann, C. (1937-49) *Geschichte der Arabischen Litteratur*. 5 vols. Leiden.
- Bibliothèque Nationale : Blochet, E., *Catalogue des Manuscrits Arabes des Nouvelles Acquisitions (1884-1924)*. Paris, 1925.
- British Library : Stocks, P. & Baker C. F., *Subject-guide to the Arabic Manuscripts in the British Library*, London, 2001.
- British Museum 1883 : Rieu, Charles, *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, vol. 3. London, 1883.
- British Museum 1894 : Rieu, Charles, *Supplement to the Catalogue of the Arabic Manuscripts in the British Museum*. London, 1894.
- Cambridge University Library : Browne, E. G., *A Supplementary Hand-list of the Muhammadan Manuscripts, including all those written in the Arabic character, preserved in the libraries of the University and Colleges of Cambridge*. Cambridge, 1922.
- Dār al-Kutub al-Zāhirīya : al-Ishsh, Yūsuf (ed.), *Fihris Makhtūṭāt Dār al-Kutub al-Zāhirīya : al-Ta'rikh wa Mulḥaqāt-hu*, 2 vols. Dimashq, 1947-73.
- Derāyatī, Moṣṭafā (2010) *Fehrestvāre-ye Dastnevesht-hā-ye Īrān*, 12 vols. Tehrān.
- Derāyatī, Moṣṭafā (2012-14) *Fehrestgān-e Noskhe-hā-ye Khaṭṭī-ye Īrān*, 34 vols. Tehrān.
- Ketābkhāne-ye Āyatollāh Mar'ashī : *Fehrest-e Noskhe-hā-ye Khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye 'Omūmi-ye Hazrat Āyat Allāh al-'Ozmā Najafī Mar'ashī*. Qom, 199?-.
- Ketābkhāne-ye Dāneshgāh-e Tehrān : Dānesh-pazhūh, Moḥammad Taqī, *Fehrest-e Noskhe-hā-ye Khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye Markazī va Markaz-e Asnād-e Dāneshgāh-e Tehrān*, 18vols. Tehrān, 1951-85.
- Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Rażavī : *Fehrest-e Kotob-e Khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye Markazī-ye Āstān-e Qods-e Rażavī*. Mashhad, 1986-.
- Ketābkhāne-ye Mellī-Malek : *Fehrest-e Ketābhā-ye Khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye Mellī-Malek*, 13 vols. 1973/4-2001/2.

- Khuda Bakhsh Oriental Public Library : *Catalogue of the Arabic and Persian Manuscripts in the Oriental Public Library at Bankipore*, 43 vols. to date, Calcutta & Patna, 1908-. (図書館HPにて閲覧可能)
- Library of the University of Leiden : Voorhoeve, Petrus, *Handlist of Arabic Manuscripts in the Library of the University of Leiden and Other Collections in the Netherlands*. Leiden, 1980.
- Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi : Karatay, Fehmi Edhem, *Topkapı Sarayı Müzesi Arapça yazmalar kataloğu*, 4 vols. Istanbul, 1962-66.
- なおトルコの3図書館(Köprülü Yazma Eser Kütüphanesi; Millet Yazma Eser Kütüphanesi; Süleymaniye Kütüphanesi)については、各館内のPC端末で利用できるオンライン・カタログを参照した。
- 研究書、学術論文等
- 'Abd al-Amir Shams al-Din (n. d.) *al-Fikr al-Tarbawī 'inda 'Abd al-Karīm b. Muḥammad al-Sam'ānī*. Bayrūt.
- Aubin, J. (1966) L'aristocratie urbaine dans l'Iran seldjukide : l'exemple de Sabzavār. *Mélanges offerts à René Crozet*, Poitiers, 323-332.
- Barthold, W. (1968 (3rd ed.)) *Turkestan down to the Mongol Invasion*. London.
- Bernheimer, T. (2005) The Rise of sayyids and sādāt : The Āl Zubāra and Other 'Alids in Ninth- to Eleventh-Century Nishapur. *SI*, 43-69.
- Bulliet, R. W. (1970) A Quantitative Approach to Medieval Muslim Biographical Dictionary. *JESHO* 13, 195-211.
- Bulliet, R. W. (1972) *The Patricians of Nishapur*. Cambridge.
- Chittick, W. C. (1995) al-Sam'ānī (Abu 'l-Ḳāsim Aḥmad). *EI*².
- Gilliot, Cl. (2002) Yāḳūt al-Rūmī. *EI*².
- Halm, H. (1974) *Die Ausbreitung der šāfi'itischen Rechtsschule von den Anfängen bis zum 8./14. Jahrhundert*. Wiesbaden.
- Kamaliddinov, Sh. S. (1993) "*KITAB AL-ANSAB*" *Abu Sa'da Abdalkarima ibn Mukhammada as-Sam'ani kak istochnik po istorii kul'tury Srednei Azii*. Tashkent.
- Muwaffaq b. 'AbdAllāh b. 'Abd al-Qādir (1996) al-Ta'rīf bi-al-Imām al-Ḥāfiẓ Abī Sa'd 'Abd al-Karīm b. Muḥammad b. Manṣūr al-Sam'ānī al-Tamīmī al-Mutawaffā Sana 562h. *Muntakhab* 1, 21-105.
- Nishimura, Jun'ichi (2008) 'Abd Allāh b. Burayda : A Tābi' and His Family in Khurāsān. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 66, 131-161.
- Rādfar, Abū al-Qāsem (1372Kh.) Olamā-ye Marv, in Mas'ūd Mehrābī (ed.), *Yād Yār ... Majmū'e-ye Maqālāt darbāre-ye Āsiyā-ye Markazī*. Tehrān, 125-146.
- Rosenthal, F. (1997) The Stranger in Medieval Islam. *Arabica* 44.
- Sālim, Munīra Nāji (1974) Ḥawl Kitāb al-Taḥbīr li-l-Sam'ānī. *al-Mawrid* 3(3), 307-316.
- Sālim, Munīra Nāji (1975) Muqaddima. *Taḥbīr* 1, 19-68.

- Sālim, Munira Nāji (1976a) *al-Bayt al-Sam'ānī min al-Buyūtāt al-'Arabiya bi-Khurāsān. al-Mawrid* 5(4), 29-58.
- Sālim, Munira Nāji (1976b) *Tāj al-Islām Abū Sa'd al-Sam'ānī wa Kitāb-hu al-Taḥbīr fī al-Mu'jam al-Kabīr*. al-Qāhira. (筆者未見)
- Sālim, Munira Nāji (2014) *al-Ḥaraka al-Fikrīya fī Khurāsān fī al-Qarn al-Sādis al-Hijrī*. Bayrūt. (筆者未見)
- Sellheim, R. (1995) *al-Sam'ānī (Abū Sa'd)*. *EI*².
- Sharon, M. (1983) *Black Banners from the East*. Jerusalem & Leiden.
- al-Zirikli, Khayr al-Dīn (1996) *al-A'lām : Qāmūs Tarājīm* (10th ed.). 8 vols. Bayrūt.
- Zhukovskii, V. A. (1894) *Razvaliny Starogo Merva*. Sankt-Peterburg.
- 森本一夫 (2006) イブン・フンドック —— 12世紀東イランのある博学者の肖像 —— 『アジア遊学』 86, 45-56.
- 森山央朗 (2004) イスラーム的知識の定着とその流通の変遷 —— 10-12世紀のニーシャープールを中心に —— 『史学雑誌』 113(8), 1-33.
- 西村淳一 (2005) サムアーニー著 *Kitāb al-Ansāb* 中に見える地名ニスバについて 『史淵』 142, 135-179.
- 西村淳一 (2009) サムアーニーとメルヴの村々 —— 12世紀の一アーリムによる村落訪問とその目的 —— 『西南アジア研究』 70, 21-47.
- 西村淳一 (2011) 12世紀ホラーサーンにおけるウラマーの地域社会像 —— 「よそ者」観の検討を中心に —— 『公益財団法人三島海雲記念財団 研究報告書』 48, 118-122.
- 西村淳一 (2013) 中世イスラーム世界「異人」研究の可能性 —— ウラマーの「よそ者」観の検討を端緒として —— 『歴史と地理』 661, 46-50.
- 西村淳一 (2014) メルヴのフサイン頭墓について —— 10～14世紀のアラビア語史料に見える記述の検討 —— 『史滴』 36, 278-254.

(人間文化研究機構／早稲田大学イスラーム地域研究機構)